



Title	地域社会に根ざして、一步を踏み出したい若者を支える : 北海道月形町におけるコミュニティワーク研究実践センターの「若者支援」
Author(s)	湯浅, 雄偉; 吉田, 弥生
Citation	青年期教育 : 青年期教育論研究室年次報告, 2016/2017, 17-32
Issue Date	2018-01-31
DOI	https://doi.org/10.14943/97149
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80869
Type	departmental bulletin paper
File Information	020_youtheducation_3.pdf



【実践報告】

地域社会に根ざして、一步を踏み出したい若者を支える ——北海道月形町におけるコミュニティワーク研究実践センターの「若者支援」——

湯浅 雄偉

吉田 弥生

目次

1. はじめに
2. 事例の概要
 - 2-1 月形町の概要
 - 2-2 月形町における若者支援の展開
3. 若者の語りから
 - 3-1 Sさんの場合
 - 3-2 Kさんの場合
4. まとめにかえて

1. はじめに

日本における「若者支援」の政策課題化及び支援実践は、若年層のパラサイト、フリーター、非正規雇用、ひきこもり、ニート等の問題意識の展開から始まった。2003（平成15）年の若者自立挑戦プラン以降、その施策内容は就労達成を目的としてきたが、若者を、単に就労意欲のない者にとらえるのではなく、社会的・構造的に生み出された弱者として位置づける認識が一般的になった。

若者支援実践の報告や検討は、近年、大きく次の5つの関心からなされてきた。第一に支援者の人材育成、第二に施設のあり方や若者の活動に関わる場の在り方、第三に各支援機関のネットワーク、第四に若者と支援者の関係論、第五に支援事業の評価論である。各論は支援現場のミクロな視点と、若者および若者をめぐる支援の社会構造や環境を問うマクロな視点に言及するが、実践現場が土台とする地域の諸関係（「おじさん」「おばさん」、サークル活動等の団体など）を介して起きる若者の変化や、それに起因する地域の諸関係自体の変化について、これまで言及されることは少なかった¹。

¹ 僅かだが、支援される主体と支援する者の実践が、交わりの機会や活動を通じて豊かに変化する様について意識的に言及する実践はいくつか存在する。例えば、『農山村再生若者白書2011』編集委員会編『緑のふるさと協力隊 響き合う集落(むら)と若者—農山村再生・若者白書(2011)—』（農山漁村文化協会、2011年）では、集落と若者それぞれがお互いの影響でどのように変化したかレポートしている。また北芝まんだらくらぶ編著『であいがつながら人権のまちづくり 大阪・北芝まんだら物語』（明石書店、2011年）は被差別部落の北芝（大阪府・箕面）で、幅広い世代がつながって起こすまちづくり活動について報告している。

本稿は、実践現場が土台にしている地域社会と若者が互いに影響を与え合いつつ呼応しあう関係を生起させる点に注目し、そこに対して自覚的・意識的に取り組む若者支援実践を報告する。若者支援を捉え直す試みの嚆矢としたい。

2. 事例の概要

本報告は、北海道樺戸郡月形町で、若者支援・生活困窮者支援に取り組むNPO法人コミュニティワーク研究実践センター（以下、コミュニティワーク）月形事業所「わくわく」の事例について取り上げる。筆者の一人である湯浅雄偉は、2012年（平成24）より「わくわく」の実践に関心を寄せてきた。ホームレス予防支援事業として開設されていたシェルターで若者たちと暮らすなどの経験を経て、2015（平成27）年から常勤職員として勤務している。また吉田弥生は、非常勤講師として担当する大学授業（札幌大学「社会教育課題研究」2016年度）の一環で月形町を訪れ、湯浅とともに調査協力者である若者へのインタビューを行った。分析は協同で行い、執筆は第二節までを湯浅が、第三節以降を吉田が担当した。

コミュニティワークでは、支援の一環として「コミュニティーハウス樺月荘」（以下、樺月荘）という若者たちの共同生活寮を運営している。この共同生活寮で暮らす若者たちは、長期無業、ひきこもり、いじめ、貧困、発達障害など、社会生活を営む上での困難を経験してきた。これらが様々に重複している人も少なくない。現在、住人は北海道内の様々な地域出身の20代から40代の男性5名と、管理人である穴澤義晴さん（コミュニティワーク研究実践センター理事長・月形事業所所長）の計6名（2017年3月現在）である。管理人はいるが、ゴミ出しや暖房の給油など些細な点においても、ルールを定めず、問題が起きればその都度話し合い、樺月荘を運営している。樺月荘はコミュニティワークが所有しており、固定資産税、火災保険などを支払うが、建築物の維持にかかる費用やその他日常生活上の共益的な費用は受益者（住人）がすべて負担している。

樺月荘あるいは、旧「多目的ハウスまどい²」（以下、まどい）で寝起きし、月形町で働き、学び、遊び、暮らす中で、若者たちは住宅の環境、家族との関係、他者との関係、仕事の内容など、育ってきた地域での暮らし方を相対化し、検討する過程を経験する。その経験は後にみるように、自分の生き方や考え方の再構築につながっていく。

月形町内で展開される若者支援は支援の入口と過程に以下の特徴がある。

- (1) 基本的には本人自身が働きたいと表明できるまでコミュニティワークが先に就労先を提案しない。週何日・何時間程度働くかということも本人自身が職員、就職先と相談の上決定する。滞在当初は、町内農家や事業者の協力で、歩合制あるいは謝礼制による就労訓練を受ける。
- (2) 地域で行われるイベントの運営補助やその後の打ち上げにも若者は参加を要請される。お祭り等は特別な理由がない限り必ず出るように促される。例えば、祭りや

² コミュニティワークが設置・運営していた「多目的ハウスまどい」は、2015年度に北海道ホームレス等貧困・困窮者の絆再生事業の終了に伴い利用者が居なくなり閉鎖した。

イベントを度々休もうとすると「なぜ月形に来たのか？」という趣旨の質問を職員から受けることになる。祭り等の手伝いで生起する、町民や職員との関わり合いをも、コミュニティワークでは若者支援に含めている。

これらの特徴は、言い換えれば、若者の自発性・自己決定の要求と、選択肢の不自由さが混在している状況と言える。若者たちはそうした状況の中で、精神的な苦労や葛藤に直面し、その状況を吐露したり、また就労訓練から脱落しかけたりする。職員の役割は、若者の訓練の受入先から若者の就労状況について聞き取りつつ、若者の苦労や葛藤の吐露を受け止め、具体的な助言を送り、利用者相互で声を掛け合うよう促し、共に乗り越える経験を援助することである。受入先でトラブルが発生すれば、若者たちと一緒に謝罪や説明することを役割としてきた。しかし、ここで重要なことは、トラブルを人間関係の終結とするのではなく、地域資源を開拓する契機ととらえ、若者自身の自己理解や就労訓練先の拡大につなげようとしてきたことだ。

以上のような現場の観察から確認できるのは、月形町におけるコミュニティワークの若者支援が、単に若者の変容を促すばかりでなく、地域との相互変容によって創られてきたことである。なお、本稿は若者の変容について記述し、地域の変容や職員の役割については稿を改めたい。

以下では、月形町という地域について概要を述べた後、月形町における若者支援によって、若者たちが何をいかに経験し、いかに自らを振り返るのかを、若者のインタビューを通じて把握し、その若者支援がいかなるものであったか、その一端を明らかにする。

2-1 月形町の概要

北海道樺戸郡月形町は札幌駅からおよそ50km北東に位置する人口3,328人、世帯数1,710戸（2017年8月現在）の町である。65歳以上の人口は4割を超えており、超高齢社会といえる。札幌とは国道275号線や、JR学園都市線で結ばれているが、石狩当別駅から石狩月形駅の区間を走る列車は1日に6本程度で、利便性が高いとは言えない。町は特別豪雪地帯に指定されており、最深積雪量100cmから265cmに及び、冬季には稀ではあるが交通・電気系統が遮断されることも起こる。このような立地状況から月形町では自家用車を持たない住民は移動不自由な生活を強いられる。高齢者においては尚更不自由である。

基幹産業は町の労働力人口の31%が従事する農業である。主要農産品は稲作の他に花卉、メロン、トマト等の園芸作物がある。他の穀類や根菜類と比較して機械化が難しく、手作業の比率が高いことから、担い手が減少している。それに伴って、現業農家の有する耕地面積が増加し、農家一戸あたりの作業負担が重くなっている。しかし後に若者たちの語りで見ると、収穫という、作業工程数の少ない労働の担い手不足だからこそ、就労経験の浅い若者たちであっても就労への門戸が開かれていたと言える。

歴史的には、須部都太（スベツブト）とアイヌと呼ばれてきた土地に、1881（明治14）年、全国で3番目、北海道で最初に集治監（樺戸集治監）が設置され、その囚人によって

形成された町である。町名の「月形」とは、旧福岡藩士で樺戸集治監の初代典獄となった月形潔にちなんだものである（1881年「月形村」と命名された）。収容者には、西南戦争で闘った旧士族や、自由民権運動の中で捕われた政治犯・思想犯を含んでいた。囚人たちは、当初は自らが収監される監獄それ自体の建設のために働き、その後は道路をつくり農地を確保するために原野を切り拓く労働に従事した。背景には政府のロシアの南下政策への危機感もあったとされる。また1964（昭和39）年、町内カトリック教会の木内藤三郎神父によって、当時悲惨な境遇にあった知的障がい児が、自給自足の共同生活を送るための施設「雪の聖母園」がつくられた。これは町内外の有志から浄財を募って建設したという。このような歴史的経緯も踏まえ、桜庭誠二・前町長の町政期（平成16年～平成28年）には「矯正・共生のまちづくり」がうたわれるようになった³。

2-2 月形町における若者支援の展開

本節では、コミュニティワークが月形町で活動を始めるといった経緯・背景と活動の展開を、若者の語りにかかわる部分を中心に記述する。

2007（平成19）年

いわゆる「ひきこもり」やニートと呼ばれる、一般就労をしておらず基本的なコミュニケーションや運動能力、生活に課題や困難を抱える若者の農作業を中心とした活動が月形町で始まった。これは当時、さっぽろ若者サポートステーション（以下、サポステ）代表、兼、北海道勤労青少年ホーム協議会会長を務めていた穴澤義晴さんが、勤労青少年ホームのかつての利用者で月形町に転居していた知人から、若者の少ない月形町での地域活性化について相談を持ちかけられたことがきっかけとなり、月形町で勤労青少年ホーム全道交流会を実施したことに端を発する。サポステ利用者を含む約70名の若者が、町内農家の就労体験付きで1泊2日にわたって参加した。この交流会は就労体験を受入れた農家や住民から好評を博し、その後は日帰り活動を中心とする受入れが行われる。

2010（平成22）年

サポステのプログラムの一つとして、田舎で暮らすことを視野に入れた事業を月形町で開始した。町内住民の清水藤子さんが、自身の畑及び自宅を開放してこの事業に協力するようになり、サポステ利用の若者による農作業を中心とする日帰りまたは一泊二日の「月形とことんツアー」と称する活動体験が定期的に行われるようになっていった。

2011（平成23）年

2月、穴澤さんが、任意団体コミュニティワーク研究実践センターを設立した（本部は札幌）。月形事業所「わくわーく」を開設し、「社会的企業の提案による雇用創出モデル事業就職困難な若者を受け止めるコミュニティづくり事業」を受託した。サポステで中心的に活動を担った職員がコミュニティワークの職員となり、5月から畑及び自宅提供者である清水さん宅にて、支援者として常駐し、下宿人の若者たちの生活・就労支援を始める。事業趣旨

³ 平成24年月形町議会第四回定例会（12月）一般質問より。

は、若者個々人の抱える困難に合わせた仕事や働き方の創造である。町内で仕入れた野菜を札幌の野菜市に卸売りに出向いたり、遊び道具の製造販売、除雪や祭りの手伝い等の地域住民の困りごとの解決で対価を得る等して職員・若者が協同で取り組んだ。11月に地域住民から空き家を提供してもらい、支援者と若者たちの共同生活の拠点「コミュニティーハウス 樺月荘」を始めた。以後、樺月荘を拠点に活動を展開していく。

2012（平成24）～2014（平成26）年

樺月荘を中心に、①＜生活＞共同生活を送る、②＜仕事＞生活費を稼ぐ、③＜活動＞地域住民との交流の場づくり、の3本柱で事業を展開し、若年ホームレスも含む困難を抱えた若者の受入れが始まった。また、月形町で初めて発足したNPO法人である「サトニクラス」⁴の設立にも参加する。夏場の農作業での就労体験に加え、地元農家と協力して農産物の加工等、冬場の仕事づくりの課題へと新しい取り組みを始める。

2013（平成25）年には、それまで重点的に生活支援を行ってきた若者たち4名の成長を受けて、7月、樺月荘をシェアハウスとして独立させた。他方で、「多目的ハウスまどい」を町内に新たに設置し、若者の一時居住支援・就労支援を継続して行うようになった。

2015（平成27）年～現在

生活困窮者自立支援法に基づく相談窓口を月形町に設置した。空知管内の14町7市に住む、生活に課題を抱える方々の相談を受けるようになる。この事業から18歳から64歳の稼働世代であれば誰からでも相談を受けるようになり、60代の利用者が一時的に樺月荘に住み、生活再建に取り組むということもあった。

3. 若者の語りから

本節では、月形町の地域社会に根ざした若者支援の内実を、利用者であった若者2名へのインタビューを紹介することから描き出す。

インタビュー調査は2016（平成28）年11月～12月にかけて実施した。対象者は、コミュニティワークによる若者支援プログラムのかつての利用者である2名（Sさん、Kさん）である。以下では、2人が若者支援プログラムを通して回復し、地域社会との関わりを深めていく過程について、どんな出来事にどのような意味を見出していたのかを整理していく。

（以下の斜体部分は、インタビューの引用である。引用部分の括弧内は、筆者が補ったものである。）

⁴ NPO法人サトニクラスは、2012年に法人設立登記された団体。農家である楠順一さんが理事長となり、月形町産の野菜を原料とする漬け物の製造・販売に取り組む。現在は障がい者就労継続支援事業A型「サトニクラス工房」を中心として活動する。法人設立以前から、楠さんはコミュニティワークの就労訓練の受入先として協力をしてきた。楠さんの地域活性への想いと、コミュニティワークを通して出会った若者たちの教育や就労機会の提供が設立の契機となった。

表 事業展開と利用者 S・K の月形への参加

年度	事業名	主な対象者と取り組み内容	利用者 S・K の年表
19 年度～	月形プロジェクト	札幌地域若者サポートステーションの利用者。日帰りの農作業体験を不定期に行った。	平成 20 年 2 月 S さん新聞を読み、サポステの利用開始。 平成 21 年以降 S さん不定期に月形での農業体験に参加。
22 年度	札幌ワーカーズ	サポステ利用者の若者と共に農作業を中心とする日帰り・一泊二日の活動体験を定期的におこなう。(25 回/42 名)	
23 年度	若者向け働き方プラン等作成事業	一泊二日体験を行う一方で、困難を抱える若者が月形に長期滞在しながら、生活支援・就労支援を行う。(25 回/51 名)	平成 23 年 S さん札幌のパン屋でアルバイト開始。
24～ 26 年度	ホームレス等貧困・困窮者の絆再生事業	ニート引きこもり、若年ホームレスを含む困難を抱えた若者を対象とした。多目的ハウスまどいを新たに設置。2012 年、樺月荘から事務所機能を移転。	平成 24 年 5 月 S さん月形町で就労を目指して移住。 平成 25 年 7 月～8 月 K さん月形町で短期滞在型就労体験。 平成 26 年 3 月 K さん再度、短期滞在。 平成 26 年 9 月 K さん月形町で就労を目指して移住。
27 年度 ～現在	生活困窮者自立相談支援事業	稼働世代(18 歳～64 歳)であれば誰でも問わず、生活に関する課題を伺い、生活再建に資するよう助言・伴走型支援をおこなう。	平成 28 年 5 月 K さん住民票移動。

3-1 S さんの場合

(1) 月形町の若者支援プログラムを利用することになった経緯

S さん(男性)は 22 歳になる 2006(平成 18)年から 2007(平成 19)年までの期間、ひきこもりを経験した。大学を中退して始めたアルバイトも半年程度で退職し、社会との接点が無くなったように感じた。そして、働く自信を失い、家に籠るようになったのがひきこもりのきっかけだという。ひきこもり状態の際は、自暴自棄になって、周囲や同世代に対する強い引け目を感じた。次第に友人の連絡を受け付けられず、動き出そうとすると失敗する光景が浮かんでしまい、就職に向けて何らかの行動に移すのは難しいと感じていた。その後 2008(平成 20)年に新聞でサポステに関する記事を読み、ひきこもり状態を克服するために通うようになった。S さんは地元である札幌市で行われていたサポステのプログラムを利用する中で、月形町の農作業等の体験プログラムに参加するようになった。

ひきこもりを続けている時は「このままではいけないという思いがずっと」あったため、サポステではレクリエーション(集団での食事づくりや議論等)や就活(求人誌を見ながら電話をする等)に向けた多様なプログラムを利用していた。利用して半年ほど経つと「サポ

ステを利用するのをきっかけに少しずつ…自分でもなにか働けることも含めて、自立したいという思い」が芽生えたという。月形での農作業に参加してみようと思ったのは、「あくまで半分気晴らしみたいな感じで。月形の農作業と、自分にどんな仕事ができるんだろう？って色んな、自分の仕事の適性を見る感じ」で行っていた。Sさんは、2011（平成23）年から札幌市のパン屋でアルバイトに取り組む。一年ほど働いて退職し、今後どうするか考えていたところ、サポステを利用していた時の仲間ですでに月形で働いていた友人から「月形で農家の仕事があるぞ、よかったら一緒に来ないか」と誘われ、2012（平成24）年5月に月形町に移り住む。

（2） 月形町での生活の始まり

①地元農家による柔軟な就労の受け入れ

コミュニティワークから若者に紹介される仕事先とは、コミュニティワークの方針や事業を理解する地元住民がコミュニティワークに仕事を発注したものである。Sさんは花農家を紹介され、5月から10月まで働くこととなる。Sさんの状況を理解して受け入れてくれる職場環境のおかげで、彼は就労への自信を高めていった。

就労経験の少ないということ、事情というか、理解された上で受入れてくださる、協力してくださる農家さんだったので。僕の実際の働きぶりを見た上で、向こうの要求するね、これができなきゃいけないとか、そういうことではなかったの。まあ僕の能力に合わせたことを用意してくれたのでそれはとても楽というか、まあプレッシャーはそんなになかったですね。もちろん最低限できなきゃ行けないって言うのはあるんでしょうけど。…（略）…忙しい時期には時間を延ばせて働けて、それなりにお役には立てたんじゃないかなという思いはありましたね。

こうして徐々に自信をつけていくうちに、職業訓練ゆえの賃金設定についても気になるようになっていた。花農家でのアルバイトは、「最低賃金とかじゃない、もっと低い金額」の賃金と夏を中心とした仕事のため「手伝いは秋になったら終わり。僕自身もずっとできると思っていない。出稼ぎ。秋になって仕事がおわったらまた札幌帰ろうって思っていた」。

しかし、コミュニティワークから、10月半ばから職業訓練ではなく、新たなアルバイト（約8万本の大根抜き）の声をかけられ、Sさんはその仕事を引き受ける。仕事の内容は非常にきついもので、一日でリタイアする人もいたという。その仕事をやり切ったSさんは、アルバイト先の農家が代表となり立ち上げた NPO 法人サトニクラスでの漬物作りという仕事に誘われ、引き受けることになる。

②サポートを受けながら家族と離れての生活

Sさんにとって、月形での暮らしは親元を離れて暮らす初めての経験であった。Sさんの

住まいには樺月荘の一部屋が提供され、数名の利用者と職員で共に生活することとなった。

自立したいという気持ちはあったので、その為には自分の生活、自分のことを全部、全部完結できるようにならないかな、と。当時ぼくは28歳で、30までにはある程度1人で生きていく為の基盤をつくらなかったら本当に行き詰まってしまうという思いがあった。

親元を離れたことが一度もなかったのも、正直、洗濯機とか使い方が全然分からない。本当に一から、コミュニティワークの利用者さんを見てくれた（スタッフの）Tさんに色々教えてもらって、生活のいろはを教えてもらった感じですね。

一緒に住んでいる人たちとは最低限のコミュニケーションをとれていたもので、生活面で嫌だなあということはなかった。気苦労は色々ありましたけどね、プライバシーとか。共同生活とかね。

このように、同居する利用者たちとの関係性も適度なものであったことと、スタッフの支えによって家事などを一通りマスターしていったことで、自分の生活をつくっていく心構えを形成していく。また、地元や親との距離感も、彼の精神的な安心を生み出していた。

（親元を離れて暮らすことが）できるかなという不安はとても強かったですけども。僕は実家札幌なんですけれど、月に一回くらいは車で帰っていたので、適度に気持ちのリフレッシュとかはできていましたし、仕事もまあ何とか自分のできる範囲だったので。

（3）職員としての就労

サトニクラスは2012（平成24）年初めに登記されたのだが、当時、実質的な活動はまだ行われていなかった。そこにSさんともう一人の就労支援プログラム利用者が同年12月から働き始めたことで、漬物作りの活動がスタートする。2013（平成25）年6月からはNPOへの直接雇用という就労形態となり、職員としての勤務が始まる。

NPO法人の代表の漬物づくりの方針は、彼らの主体性を活かすものであったという。Sさんは、そのような作業の進め方について、以下のように捉えている。

特定の人に教わるよりかは僕らが考えて…勉強しながら、指導する人がいると確かに覚えるでしょうけれども、自分でこう中々調べてって言う感じにつながらない。僕らを成長させたいというんだったと思います。

そこで、Sさんは情報収集しながら試行錯誤して漬物の開発を行っていった。次第に、サトニークラスの漬物は、品質重視の商品という戦略のもと、札幌駅ビルなど都市部の食品売り場でも取扱いがなされていった。

サトニークラスは2014（平成26）年11月に、就労訓練参加者に占める障害者の割合が増えていったことと、持続的な経営の基盤づくりを理由として、就労継続支援A型事業所として認可を受け活動を行うこととなる。そこで、Sさんは障害を持つ人びとを指導する立場となる。こうした状況に置かれたからこそ、新たな発見もあったという。

人間誰しもそんなやりたい仕事をされている訳じゃないとも思うんですけど、（はじめは）自分にできるのかなって。人と話すのもうまくいかない。へたくそな自分が仕事を教える、ましてや障害のある方に。まあ、知的の障害を持たれている方とかそれまで本当に、話とか接する機会がそんなになかった中で、実際に仕事をしてみると、ある部分ではあまり手先の細かい精度を求められる仕事に向いていないんですけど、力作業ですかね、それこそ大根抜きだとか、モノを運んだりとか、力仕事とか、とっても得意というか、僕なんかとても太刀打ちできない方とか多くて、逆にこっちが教わる場面が多かったです。年配の方なんかは教わる人が多いんです。

仕事に対するやりがいは、指導する役割としての立場から見出されていた。

いま一番若い方で23かな。若い子、その子が知的（障害）の子なんですけれども、癪癪があるんですよね。その子はわりかし器用で、計算なんか得意なんですよ。だから今僕は彼に計量だとか、レシピとか僕がつくったやつがあるんだけど、今日はこれは何キロでとか全部そいつが計量して、計算して、全部任せてるんですよ。そんなやつなんですけど、最初はなかなか物覚えが悪くて、こらえ性がなくて投げ出そうとする。どう彼に接すれば彼の能力を引き出せるかなあと考えたんですが、他の職員さんとかとこうした方がいいんじゃないかといろんな試行錯誤をしながら、仕事を覚えてくれたときなんかは嬉しい。達成感というか、僕の負担も減るので。仕事を覚えてくれたらね。そういうときにまあ、自分の目標とか、自分の思いというか成就された達成感がありますよね。

（利用者への）仕事の振り分けは、結構大変だったりしますね。1人の人間なので、その人の自尊心とかを傷つけないように（しないと）いけない。

このようなSさんの配慮は、彼自身が就労にむかっていく中で周囲から受けたものであり、それがSさんから利用者への態度として継承されていると考えられる。

(4) 月形町で暮らすことの意味

月形町という地域社会で暮らすことやコミュニティワークの若者支援事業の特質を、Sさんは人とのつながりの濃さに見出していた。

やっぱりちっちゃな町ですし、これはまあ、良いところばかりでもないですけども人、連帯感というか、一人暮らししてからも、まあコミュニティワークいたときも感じましたけれども、近隣の方との付き合いが札幌とは比較にならないですね。ゴミ拾いとか、定期的にやる、スポーツとかお誘いがあるんですけど、僕はなかなか行かないんですけれども。多いんじゃないでしょうか。もう勘弁してくれよというくらい。良くも悪くも、濃いですね。まあ、色んなものもらったりとかね。一人暮らしするときもコミュニティワークから色々もらいましたから。一揃えしようとする、本当にお金掛かりますからね。…(略)…孤独死はないだろうな。

一方で、車が無ければ生活しにくい点も指摘している。しかし、札幌近郊であることで、その点は我慢できるものと理解されていた。

買い物とかの不便さは感じますよね。今は車があるので行こうと思えば岩見沢に行きますけれど、来た時は車もなかったんで、今の時期冬場は月形まともなスーパーはAコープ一軒しかないですから。あそこは冬は6時までしかやっていませんから。僕はだから月形から札幌まで車でだいたい一時間、汽車だったら90分、帰ろうと思ったら帰れる。そういうのが僕にとってよかったんじゃないかと。

実際はそんなつらい一って言って帰ったことはないですけどね。コミュニティワークの支援があったからこそ、今の僕があると思うので。

(5) これからの生活への見通し

Sさんは、インタビュー時点で、月形で就労し始めて5年目を迎えている。そのことについて、「本当に初めてきた時はこんなに長くなるとは思いませんでした。それまでアルバイトしかなかったんで、初めてここで正規の職員としてちゃんと(社会保険の)三法とかもつけてもらっていますから。本当、うちの代表には感謝しています。」と述べる。そして、今の自分が大切にしたいことはNPOでの仕事であるという。

子どもの頃とかは電車の運転手とか憧れていましたけれどもね。実際、採用試験を受けたこともありましたがなかなか採用にはいたらなかったですね。今でもなりたいたなと思うことは。貨物とかだったらまだ多分あるかもしれません。中途採用とか35くらいまでなら。でも今、会社がようやく経営も、やっと本当に代表の支援とかなしに、

運営が成り立とうとしている。やっそこまで来たんですよ。代表への恩義がありますので、自分のしたいことがあるから会社を離れるとか、そういう考えになるかどうかは分からないですね。

これから先何をしたいか。今の仕事をより理解して、福祉のことまだまだ勉強して覚えたいと思っていますし、今は。今の仕事をより、利用者さんと一緒に、会社の売上げとか、そういう内容を増やして、会社の規模がもっと大きくなれるように、その為に頑張りたいと思っています。仕事自体は僕は正直、生活する為の手段というか。まあ、冷めていると言ったらちょっと、語弊あるかもしれないですけども。縁があつて、今の仕事していますけれども、自分にできる仕事なので、いま自分にできることを、仕事として、それができて、賃金をもらって、何とか生活できているので。ひと一人で生きていく為に、今できる仕事をがんばってやるという感じですね。

このように、Sさんが今後もサトニクласの職員として働いていく理由は、NPOの代表に支えられてきたことや、自分がサトニクラスの活動を進めてきたという自負によるものと考えられる。

3-2 Kさんの場合

(1) 月形町の若者支援プログラムを利用することになった経緯

Kさん（男性）は、高校時代から感じていた対人不安や妄想（「人がすれ違う瞬間に、咳払いとか髪をさわったりだとか自分が向けられてるんじゃないか」）が大学1年生の半ばで強まり、次第に大学に行かれなくなって7年ほどひきこもっていた。東京というあまりにも人が多い環境がKさんを追い詰めており、大学3年生の秋に休学したことを機に、父の仕事仲間に月形の若者支援事業を紹介された。2013（平成25）年の夏に月形で短期滞在をした後、「一回大学に行き直そうかなとやってみたんですけど結局うまくいかず、ぐずぐずしているくらいなら（月形に）行っちゃおうかなと」「よくわからないけど。行っちゃえって。ほんとこんな感じです。どこでもいいから田舎に行きたいぐらいの勢いで」、2014（平成26）年9月に移住することになる。

(2) 月形町での生活の始まり

①地元農家による柔軟な就労の受け入れ

Kさんは月形にやってきて、まず、コミュニティワークの就労訓練に取り組み始めた。1時間あたり500円の謝礼が支払われるトマト収穫である。しかし、一か月でリタイアしてしまう。その時の心境を、「自分のいたらないところというか、病気のところもあったと思うので、とにかくそこの農家さんから成果を出すことを求められていると勘違いしてしまつて。で、自分を追いつめちゃってリタイアしちゃったんです。」と、振り返っている。

そこで、すぐにコミュニティワークからサトニクラスの仕事を紹介され、A型事業所の利用者として働き始めることになる。

②サポートを受けながら家族と離れての生活

Kさんはまどいに住むことになり、職員に夕食作りを一緒に手伝ってもらうなど、「本当に、生活の支援」を受けられたという。しかし、国のホームレス等貧困・困窮者の絆再生事業予算が打ち切られたことで、職員が利用者と共に暮らして生活をサポートする人件費が無くなり、ある程度の家事や共同生活の自治に参加できる人でなければ、施設として受け入れられなくなった。滞在する人が減り、まどいに住むのはKさんだけになったという。自分でしなければならないことが増えていったものの、トラブルや相談に細やかに対応してくれる職員が近くにいたので安心感につながっており、「結果的にはよかった」と捉えている。こうした職員との関係や、地域住民とのつながりのもとで、Kさんは仕事帰りにコミュニティワークの事務所に立ち寄ったり、色々な地域の飲み会にも参加して、月形町の人々と交流を深めていった。

また、家族との関係性も改善した。距離感がもてたことで、相談事がしやすくなったという。

やっぱ正直、親がいないとこの生活が成り立たなかったなと思います。最終的に、家にひきこもって迷惑かけて、親と仲が悪くなくても、最終的にはそういうところで一番だなと。色々相談事したり（関係としては）良くなったっていう感じ。こっち来て。親が、うっとうしいのがなくなった。（月形に来てから親に相談することは）気晴らしになった。

（３）サトニクラスでの就労

2014（平成 26）年の秋から、サトニクラスで働くことになったKさんは、事務と畑仕事を中心に、時には商品ラベルのデザインなど幅広い仕事をこなしていった。特に、デザインの仕事がKさんは得意分野だと考えている。

施設外労働として畑作業をするのが「一番大変」で、体力勝負の仕事は途中でリタイアすることもある。しかし、共に働く利用者が、障害を持ちながらも軽々となす様子を見たことで、「色々な人がいるんだなあということが知れて、障害を持っても一般の人よりも全然仕事ができる人がいるんだなあ」という風に新たな認識を得られたという。また、肉体労働によって体力がついたこともKさんの自信につながっている。

（４）月形町で暮らすことの意味

①地域住民との交流

首都圏で育ったKさんにとって、月形町という農村社会は地元と大きく異なる環境であ

る。しかし、Kさんには、以下にあるように、顔が見える関係性が安心感をもたらすものであった。

びっくりじゃないんですけど、やっぱり人間関係が濃いのが、みんな町内のどこに誰がすんでいるかっていうのが（わかるのが）ちょっと、抵抗はなかったんですけど、でも、違いかなと。（東京で）僕の住んでいる建物、マンションが、父親の事務所があるんですが、そこは人との繋がりをつくるっていう方向性で設計されたマンションなんです。だから特別にそこだけが（人との繋がりが）あったんですけど、でもそれ以外はなかったですね。

いやもう、（月形では）ご近所トラブルとか現在進行形でありますよ。巻き込まれそうになってどうしようかなって思っていたところですよ。ご近所さんのトラブルに巻き込まれそう。でもそこは中立にたって、っていう感じ。まあそういうのありますけど、そっちの方が過ごしやすいです。（顔が分かる）そういう関係の方が僕にとっては、治療する上で良かったんじゃないかなと。

そのような自覚のもと、地域のイベントにも積極的に参加し、同世代の若者とも交流するようになっていったという。そこから、自分の仕事の適性も実感していく。

（地域のイベントは）できるだけ参加しようとしています。自分のペースを乱さないようにしつつ、でもできるだけ参加できるように。たとえば「わくわーく」関連で言うと、冬のスノーシューのイベントって言うのがあって、西洋カンジキを履いて、林の中を探索したりする。雪で埋もれるので、冬の間は林のなかを歩けるんですよ。あとイベントで言うと、月形夏祭りというのがありまして、月形の一年の中の一番のイベントなんですよ。最初はわくわーくのお手伝いとして行って、その次からは仕事として、サトニク拉斯の利用者として行って、そこで思ったのが、人付き合いって意外と楽しいなっていう。接客って楽しいんだ、っていうのが自分に合ってることが分かってよかった。ああ、単純に人の役に立てるのがいいな、自分の行っているのは嬉しい道なんだなと。前だったら（イベントの打ち上げがあっても）絶対に帰っているんですよ。それが行けるようになった。

②地域住民との助け合い

Kさんは、コミュニティワークの事業協力者であり、地域住民のSTさんとのつながりで、ある読みものの編集作業の手伝いもしている。かつて道内で刊行されていた新聞紙「北海タイムス」で連載していた特集記事「ああ沖縄」⁵を、インターネット上でサイト開設をする

⁵ 「ああ沖縄」は1965(昭和40)年、戦後20年の節目の年に当時の北海道日刊紙『北海タイムス』に、267回にわ

という形で復刻するプロジェクトである。

「ああ沖縄」のきっかけは、STさんの旦那さんが残した「ああ、沖縄」っていう連載記事を（Kさんの上司でありサトニクラス代表の楠さんが）、これはもったいないから世に出すべきだ。若者たちの声で、っていう形で世に送り出すべきだという風に考えて、それでSTさんに来たんですよ。STさんが自分でワープロ打って、パソコン打って、世に送り出そうかなってやってたところで、「Kくん、この変換をどうやってやるのかい？」って聞かれて、「ああ、これだったら僕できますよ」って言ったら、「じゃあやってもらっていいかい」っていう感じになった。ほんとちょっとしたことです。

（いろんな人とつながっていけるのは）月形のお陰だなんて。環境があつたっていうのと、それを後押ししてくれるような自分の心の準備が整ったこと。（仕事と生活に境目がないことは）逆にそれが安心感。父親がそういう生活をしているので。多分腑に落ちたんでしょう。暮らし方が。（吉田：サトニクラスでお仕事もあるけど、日々色んなことやっているんですね。）やらせてもらえる環境があるっていうか、まあ努力していないと。

このように、生活の中で地域住民との交流の中で人びとに支えられたり、反対に自分が役に立つ関係性があることは、Kさんにとって、人との関係の築き方や働き方を模索する場として好ましい環境と理解されている。

（５）これからの生活への見通し

Kさんは、職員や地域住民との交流によって、自分自身が感じていた課題が一步步乗り越えられていることを実感している。

ちょっとした苦い経験があつて、こうやってみんなで集まって会食っていうか、わいわいやるっていうところで、焦って分け分かんないことを言っちゃってたんだよね。それで、そういうのが本当集団で何を話したら良いんだろう、友達と何を話したらいいんだろうというところから始まったんで。それがある程度、自分なりに、自分の思ったことを話せば良いんだなと納得できたところが印象に残っています。そういう基本が残ったっていう。色んな経験をさせてもらった中で、その中で練習ですよすべて。人付き合いも。それが会話っていうところで成果として出てきたのかなって言う感じですね。とにかく会話は苦手って言う認識しなかったんですよ。

たつて連載された特集記事である。北海道から沖縄戦に送り込まれた元兵士たちの証言、日記、手記が織り込まれた読み物だった。当時、読者から証言、依頼を含む様々な反響が寄せられる人気連載だったが、1998（平成10）年に「北海タイムス社」は廃刊し、現在は数館の図書館で、原紙やマイクロフィルムとして書庫に保存されたもののみが閲覧可能になっている。

一歩ずつ、加算していくとすると、まず人付き合いが、障害がちょっと減ったということ。一歩。人間関係のなかでうまくいく術を見つけたところでもう一歩、二歩で。後は仕事、そろそろ一般就労に向けて動き出せると三歩目かな（湯浅：三歩の歩みのなかで、月形にきて一番印象に残っていることってなんでしょう？）やっぱり人間関係を支障なくやっていけるっていうのが。

現在の職場は就労継続支援 A 型事業所であることから、仕事がない時期だと労働時間が短縮されるというかたちで利用者はあおりを受けることとなる。そうした状況も、Kさんが「もうそろそろ一般就労に行った方がいいな」と考え始める要因となっている。

（今後は）まずは一般就労。迷惑かけないで、今仕送りしてもらってるんですよ。A 型事業所の稼ぎだけでは厳しいので。まあ、稼ぎと、仕送りが合わせて 10 万になるようにしてるんですよ。そこを無くして、散々迷惑をかけてきたので、独り立ちしたい。で、車を買って自由に。車ないんで。そこは辛いです。

第一志望とかあります。職種というよりは、事務。自分の能力を行かせる場所に行きたいという感じ。それならどこでも。（吉田：全国どこでも？）いや、月形町内です。町内ですね。

Kさんは、自分が回復できた月形町というまち、地域住民との関係性のなかで、自分の力を発揮したいと考えるに至っている。

4. まとめにかえて

月形町で行われている若者支援の取り組みの特質を仮説的に整理すると以下のように言える。

Sさんの事例は、コミュニティワークの就労訓練や樺月荘での生活を土台とし、サトニクラスで漬物づくり事業の立ち上げに関わり、その担い手としてサトニクラスを支える存在になっていく過程であった。Kさんの事例は、就労訓練に加え、コミュニティワークの職員や地域住民との交流を通じて、自分らしいコミュニケーションや働き方を模索していき、月形町で働き暮らすことを目指す過程であった。両者とも、職員や地域住民との関係の中で、支え・支えられる関係を創り出している。だからこそ、月形町で暮らしたい、働きたいという思いにつながっていることがうかがえる。また、この過程を通して、自分自身の過去の捉えなおしや家族との関係の相対化もなされていた。

以上の過程においてコミュニティワークは、地域社会のなかで若者が自分らしい自立を見出していくために、仕事の場にとどまらない地域住民との出会いや多様なレクリエーシ

ョンなどの機会を提供していた。寮での生活や就労にあたっては、職員や地域住民が彼らをサポートすることで、失敗も許されるような安心して取り組める場づくりがなされていた。特に、SさんもKさんも職場での障害を持つ人々との出会いを通して多様な個性が活きる働き方の発見をしており、それは自分の働き方を模索する上で大きな励ましとなっていた。さらに、徐々に仕事への裁量が与えられ創造性を発揮していったことにより、Sさん・Kさんは自己肯定感を高めながら、コミュニティワーク職員との関係だけでなく、職場や生活における様々な地域住民との多様な関係性を築くことが可能となっていた。Sさんの場合は漬物づくりの主導、Kさんの場合は「ああ沖縄」の発信にみられるように、決して彼らは「支援対象者」として位置づけられたままではなく、ともに地域社会を創り出す主体としての関係性が育まれていた。

月形町で進められている若者支援は、若者を支援の対象者として留めおかず、地域そのものを舞台に展開する実践であり、ひとが育ちあい、地域資源が育まれ、地域づくりへと展開する可能性を持つものであろう。当実践は、若者支援にとどまらず、多様な人びとの社会参画を保障する支援と場のあり方にも示唆を与えるのではないだろうか。

今後は、コミュニティワークの若者支援の展開がもたらした地域社会への具体的な影響や、地域社会のなかでコミュニティワークの果たしている役割について明らかにしていくことで、地域と若者が呼応しあい、育ち合う関係を創造する地域社会のあり方を検討してゆきたい。